F－8　明治以降における家計簿記研究の史的考察（第1報）

東京家政学院大家政　三東純子

目的　家計簿記の研究はこれまで簿記学的あるいは生活的な立場からおこなわれてきた。しかし，先輩の研究や教育に学ぶ史的考察はほとんどおこなわれていない。そこで，家計簿記研究の経過や傾向を明らかにして今後の研究に指針を得たいと考えた。

方法　家計簿記に関する専門の図書，家計簿記に関する記述部分を含む図書，発行家計簿記などを資料として家計簿記理論の変遷を調査した。また，社会の進歩や家政学の発展，簿記理論の発達などと関連づけながら考察をおこなった。さらに，著者の経歴その他との関連においても考察を進めたいと考えている。今回はその第1報として明治時代の初期から昭和10年代に至る70年間に発行された図書や家計簿記のうち，内容を検討することのできたものについて編年史的に概観し報告する。

結果　明治大正時代には複式家計簿記または現金収支のみを対象とする家計簿記が採用されていた。初期の複式家計簿記理論は人的勘定学説によるものが多く，後には物的勘定理論によるように変化している。これまでの調査では昭和12年発行の"家事経済新講"を最初として，複式簿記理論を用いなくても記帳計算ができて結果は複式家計簿記を用いたのと同じになる第三の家計簿記ともいえるものが登場している。

この研究は文部省助成による共同研究の一部であることを記して謝意を表する。